

ふるさとの 震災現場をみて

三鷹市 永島セツ（佐内出身）

十月二十三日に中越地震が起き、ふるさと上越も被災した。

地震発生日の前日に上越から妹夫婦が上京、三鷹の我が家に泊まり在京の子供たちを訪ねる、ということでの旅であった。

二十三日の夕刻六時に吉祥寺の待ち合わせ場所に行くと、姪が携帯電話で「上越や長岡が大地震で大変なことになった。」と知らせてきた。

上越新幹線が脱線したこと、ほくほく線や信越線も不通ということに一同呆然とし、直江津や長岡の親族の安否を確認しようと思いついたが、当日は電話も不通であった。翌日になってやっと連絡がとれ、全員無事であることがわかり、安堵した。

十月二十五日にローカル線乗り継いで私も妹夫婦とともに直江津を訪れ、被災

の現場をみてきた。上越の友人たちの安否を確認、全員無事とのことであったので、当日ひとまず帰京した。

十月二十六日のニュースで不通だった越後線が二十六日に午後三時過ぎに開通の見込みと報じた。長岡へのルートが開けたので、救援物資をザックに詰めて午後一時過ぎに三鷹を出発した。長野新幹線、信越線、越後線、弥彦線、信越線と乗り継いで長岡に着いたのが午後十時だった。

弟の家にとどり着いて長岡の被災状況の惨状を見て、自然の摂理を甘く見た「人災」ではなかったかと思つた。

電気、ガス、水のライフラインは全て絶たれ、寒空のしたでひたすら救援を待っている多くの被災者へのサポートを今こそ何にも優先して国を挙げてなすべきことではないかと痛感した。

帰京の際に越後線で良寛にゆかりの駅通過したとき、「死ぬときは、死ぬがよろし」と言った良寛の言葉を肝に銘じ一日を大切に生きようと思つた。

阪神淡路に震災よりも甚大な被害をもたらしたこのたびの中越地震の現場をみて自らの暮らしては、「シンプルライフ」に徹したい、いざ鎌倉のときのわが身の処し方を原点に立ち返ってしっかりきめておこう、いつかはやってくるであろう首都圏を襲う震災に備えて！。

